

史料にみる **歴史**

摂州神戸海岸繁栄之図

神戸市立博物館蔵

この錦絵は、関西で活躍した長谷川小信（1848～1940）が描いた三枚綴りの作品である。彼は1875（明治8）年に父の後を継ぎ二代目長谷川真信を名乗るが、絵の左下には「小信」とあることから、二代目襲名前の作品であることがわかる。

絵は神戸の外国人居留地の南端、海岸通りを西の方から、外国商館が立ち並ぶ中心部を望んでいる。港には、「ストンボ」とよばれた小蒸気船などの西洋汽船が3隻、西洋帆船が1隻、そして千石船の和船などが浮かんでいる。西洋汽船には辮髪（べんぱつ）の中国人の姿が多い。中国人は海岸通りでも見られる。洋服姿の欧米人のなかには、馬に乗った人、三人家族らしき人もいる。だが、一番多いのは日本人で、商人とおぼしき人が多く、仕事をしている職人、旅人、遊歩の女性なども描かれている。馬車や屋根付き人力車もある。断髪（だんぱつ）の日本人男性は見られないので、この絵は開港から間もない1870年前後の様子を描いていると思われる。

神戸港は西暦1868年1月1日（日本暦では慶応3年12月7日）に開港した。1858年締結の日米修好通商条約などの「安政の五か国条約」で、兵庫が5開港場の一つに指定され、大阪の開市とともに1863年1月1日の開港が約定された。しかし、尊王攘夷運動が激しくなり、京都に近いこともあ

って、幕府は1862年に列強と交渉し、開港・開市を5年間延期することを認めさせた。他方、朝廷は兵庫開港を認めず、その後も幕府とのやりとりが長く続く。兵庫開港の勅許が得られたのは1867年のことで、孝明天皇逝去から約半年後のことであった。

開港予定地の兵庫は、平安時代に大輪田泊として栄えて以降、港町として発展し、近世には約2万人の人口をようするほどに繁栄していた。このため、兵庫には居留地を建設できる適地はなく、兵庫の東側に位置する神戸村に居留地が建設されることになった。居留地は、イギリス人土木技師J.W.ハートの設計にもとづき、126の整然とした区画に分けられて建設され、プロムナードや遊園地も建設された。整地された居留地は、順次、1868年から73年にわたり4回に分けて、その永代借地権が競売に付された。大半はイギリス人が所得した。こうして得た土地に建ち並んだ洋館は「異人館」と呼ばれ、東洋一美しいといわれる居留地となった。

居留地の周辺には外国人遊歩地も設定された。また、居留地の外と六甲山麓以南の地に内外人の雑居地がつくられたが、その高台の地にも洋館が建てられていて、それは本図にも描かれている。ただし、中国人は当初、無条約国人であったため、居留地の外、西側の地に住んだ。それがやがて元町の中街に発展する。

洋館には、領事館・商館・銀行・教会堂・ホテル・住宅などがあつた。初期の洋風建築にはベランダ付きの2階建が多い。それは本図からもうか

がわれる。さらに外国人は、ガス灯・電信・上水道・下水道などのインフラを整備し、洋家具・活版印刷・洋服・製糸・茶精製・マッチ・石鹼・ゴム・造船・紡績などの産業を居留地にもち込んだ。そこに日本人が雇われて技術を修得する。やがて外国人から会社を引き継いだり、新たに起業する日本人も出現した。こうして神戸は、近代産業の一つの起点となった。企業の有り様は時代の推移とともに変化するが、造船と紡績は神戸を代表する産業として発展していく。

開港直後5年間（1868～72）の貿易総額は、輸入が約16.7万円、輸出が約7.4万円で、輸入が多かった。輸入品の大半は毛織物などの織物と武器が主であった。輸出品の第1位は茶で、第2位の生糸を大きく引き離している。輸入相手は中国が筆頭で、この関係もあって、神戸在住の外国人は中国人が圧倒的に多かった。日清戦争後の1896（明治29）年、綿花の輸入関税が撤廃されると、中国・インドから輸入される綿花が神戸港輸入品の第1位となった。輸入綿花は、関西地方の紡績会社で綿糸に加工される。綿糸は国内でも消費されるが、綿布などとともに中国をはじめとするアジア諸国にも輸出される。1897年以降、神戸港の輸出品の第1位は綿織糸となった。

その紡績業では、1882（明治15）年創立の大阪紡績会社がある大阪とその周辺で急成長し、マッチ産業も発展した。しかし、神戸港は、貿易高では大阪港を抜き、横浜港につぐ日本第2位であり、東アジアとの貿易の拠点として成長していった。

（共立女子大学教授 阿部恒久）